

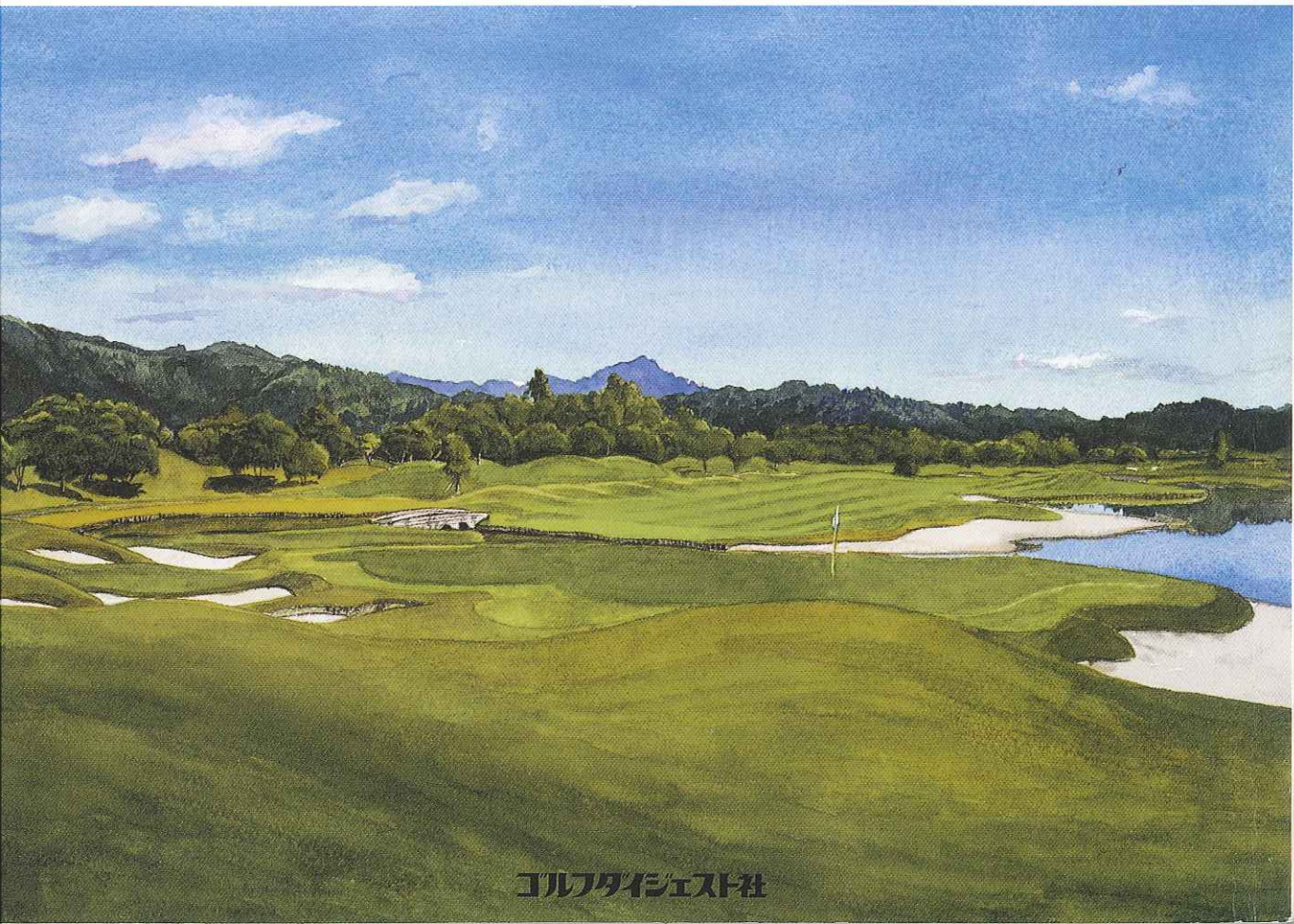
Golf Course Management & Maintenance Magazine

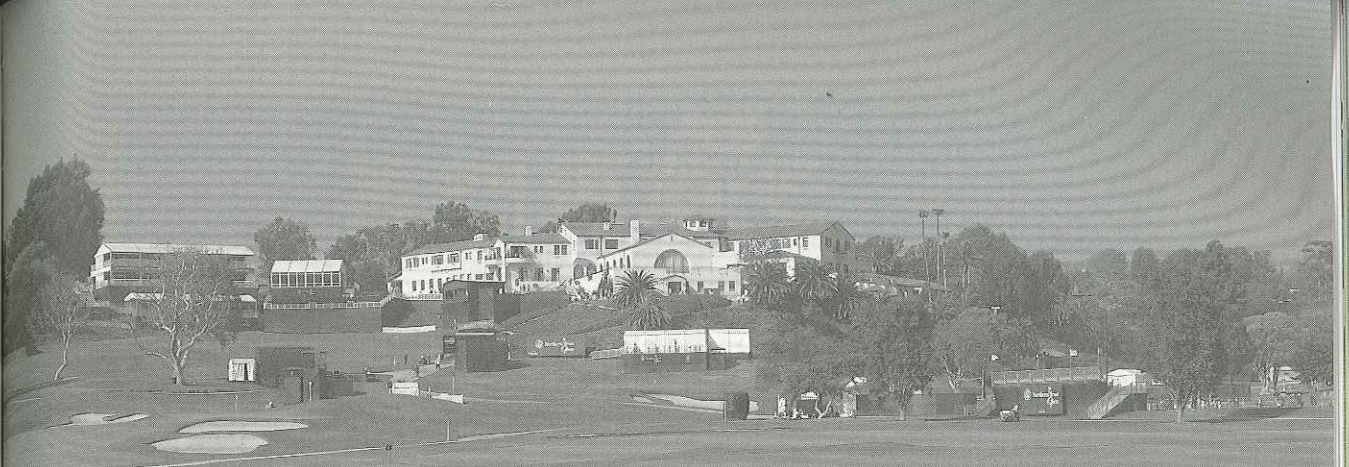
平成27年5月1日発行
(毎月1回1日)
第48巻第5号

ゴルフ場セミナー

5月号

座談会 練習場からの本音リクエスト
メリット多し! 料金先払いシステム
いろいろあります `派生ゴルフ`
米国PGAツアーコース管理レポート





USPGAツアー コース管理 実体験レポート

2月19日～22日に行われたUSPGAツアー、ノーザントラストオープンにコース管理スタッフとして日本の若きコースマン3名が参加した。今回の企画立案、そしてエスコート役を務めた大江康彦氏に、現地での活動状況と米国のトーナメント管理の内容をレポートしてもらった。

レポート
大江康彦
(CGCS、コース管理アドバイザー)

スケールは桁違い、
作業も厳しい
でも、技術では
負けていない！





スーパーインテンデントのモートン氏と、左から田中、乙黒、内山の若手コースマン3人

USPGAツアーの1つであるノーザントラストオープンは、2月19日〜22日、米国カリフォルニア州ロサンゼルス近郊（バシフィックパリスエイズ市）のリビエラカントリークラブで開催された。このトーナメントの前身はロサンゼルスオープンで、1926年が第1回となる歴史ある大会である。08年からノーザントラスト社がスポンサーとなり、現在に至っている。

会場となるリビエラカントリークラブ（18H）は、26年にジョージ・トーマス氏の監修により開場した。同トーナメントをはじめ、48年全米オープン、83年95年全米プロといったメジャーなど、数多くのトーナメントを開催してきたことで知られる西海岸の名門コースである。

コースの芝種は、グリーンがベニコロスベントとスズメノカタビラの混合（カタビラの占有率70%ほど）、ティグラウンドがティフトン芝（キクユ芝の混在も観察された）、フェアウェイ（FW）とラフがキクユ芝で構成されている。

昨年春に同CCCのスーパーインテンデントであるマット・モートン氏が来日し、その折、高温多湿という気象条件にもかかわらず、非常に高いレベルでベントグリーンを管理をしていると、日本の管理技術に高い評価をした。そして、「短期間であっても、次代を担う人たちに米国のコース管理を勉強させてみてはどうか」と申し出があり、今回の話が実現した。もちろん、リビエラCCCやPGAオブアメリカの協力・理解があつてのことではあるが……。

全米の名門コースのアシスタントばかりがボランティアに集合

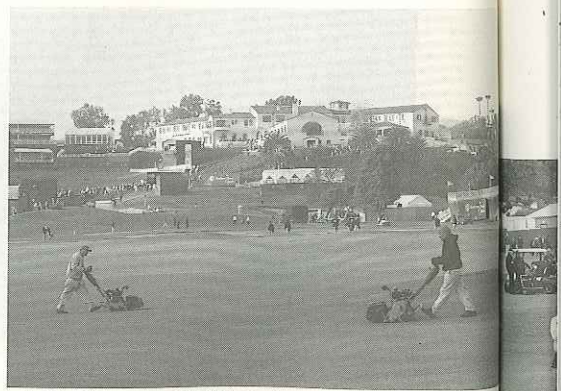
海外のトーナメントでは、多くのボランティアが参集して準備・運営を手伝うのが一般化している。しかし、今回はそうした公募による一般ボランティアとは一線を画し、モ

ートン氏が自ら個別に依頼文を送付して集まった外部応援スタッフとしての参加である。ボランティアの場合、通常、コース管理作業と言っても、コース清掃やバンカー清掃が主なので、管理機械に触れることもないケースがほとんどだ。しかし後述するように、今回の応援スタッフについては、機械操作はもとよりグリーン刈りまで任される役割だった。

この応援スタッフは35名前後いたが、その顔ぶれがすごい。メリオングルフクラブ、オークモントカントリークラブ（ペンシルベニア州）、オークランドヒルズ（ミシガン州）、シネコックヒルズ、ウイングドフットゴルフクラブ（ニューヨーク州）、ザ・カートランドカントリークラブ、ミューアフィールド・ビレッジゴルフクラブ（オハイオ州）、バルハラゴルフクラブ（ケンタッキー州）、コングレッショナルゴルフクラブ（メリーランド州）など、錚々たるゴルフ場のアシスタント・スーパーインテンデントがほとんどだった。ちなみに、会場までの交通費、滞在費などは原則的にリビエラCCCの負担である。ただ、唯一日本から加わった我々は初参加でもあり、渡米費用だ

けは自費として申請した。

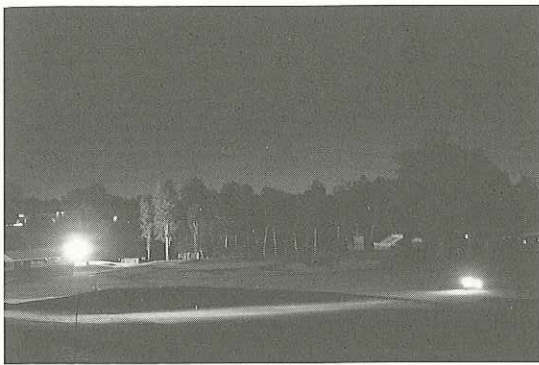
今回の研修に参加するメンバーを選挙するにあたって、ゴルフコース管理者として『何かにチャレンジしてみたい』といった向上心のある若手であること、現地スタッフと交わって一緒に作業をするなかで、日本人としてのスキルの高さを表現できる点を留意した。当初は10名程度の人数での計画だったが、最終的には現地との調整で私を含めた4人が渡米することになった。参加者は田中諒（28歳／鹿沼カントリー倶楽部）、乙黒将（28歳／富士クラシックス）、内山翔（26歳／北海道クラシックス）である。2月13日に成田を発ち、時差調整をした後、15日から現地に入った。



日本製のグリーンモアが活躍していた

早朝から夜間まで 70名超のスタッフが一 班ごとに作業

ゴルフ場は前週木曜日（12日）からクローズしてトーナメント準備が始まるが、我々は開催週の1週間、リビエラCCにて作業に就いた。その間のスタッフは、前述した応援スタッフと元々のコース管理スタッフの計70名前後である。その上に、スーパリーインテンドント、アシスタント・インテンドント、アシスタント・インテンドントの3名、さらにフォアマン（班長）と呼ばれる幹部候補生



投光器を使い、早朝から日没後も作業をする

（大学卒）が6名、メカニックが4名という布陣である。管理スタッフは、フォアマンのもとでチーム分けられ、それぞれの作業にあたる。ただし、応援スタッフの中にはこの管理作業に何度も来ている経験者がいて、作業内容によっては彼らがリーダーとなつて別チームを編成することもあった。こうしたゴルフ場側の管理態勢とは別に、PGAツアーから派遣されたトーナメントディレクターがいる。日本のトーナメントディレクターの場合、ツアー機構やJPGAの1名が責任者として運営とコース管理全般をチェックする。しかし、USPGAツアーでは、コース管理専門のディレクターが配置される。このトーナメントでは、ジェイ・スボールという、PGAオブアメリカのアグロノミスト（農学者）であった。スボール氏が毎日コース状態をチェックし、「水を撒いた方がよい」とか「バンカーの小石を拾ってほしい」などの細かい指示を出す。これは、出場選手が指摘したことであったりもする。

作業は基本的に早朝と午後の2部制で、昼間の休み時間は、各人各様で宿舎に戻る者もあれば、近くの街

にショッピングに行く者もいる。ただし、起床は毎朝3時で作業の終わりが19時半なので、体力的にはかなりハードだった。作業スケジュールは以下のとおりだが、早朝と夕方は大型の投光器を何台も使用しての作業だった。

作業スケジュール

2月15日（日）

15時

コース管理棟内にて、スーパリーインテンドントのマット・モートン氏より挨拶。スタッフ・応援者全員の自己紹介の後、アシスタント・スーパリーインテンドントのダン・ミラー氏より今回のトーナメントスケジュールの説明。内容は、4時から朝礼・作業指示、8時30分朝食。13時に昼食、トーナメント期間中は午後作業のスタート時間に変更があること。作業終了は原則19時30分とするなど。また、朝と夜のゴルフ場（宿舎間の移動はすべて送迎車が出る旨の通達があった。ミーティング後、グループに分かれて全員でコース視察を行った。

2月16日（月）

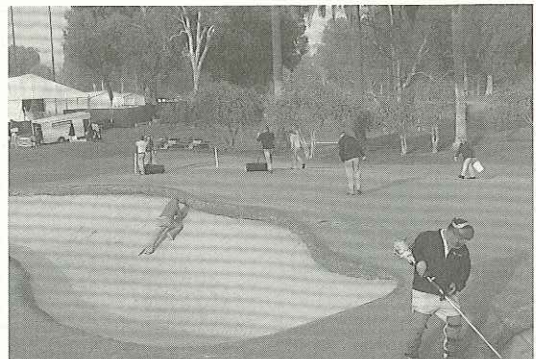
この日は全米各地から選抜された学生とアマチュア代表によるマンデートーナメントである。

4時

作業指示ミーティング。

4時15分

投光器の中で作業開始。作業分担としては、グリーン刈込4名、練習グリーン・アプローチグリーン刈込1名、アプローチ・エプロン刈込6名、チャンピオンティ刈込4名、FW刈込（乗用3連モア）13名、フェアウェイ転圧2名、ティ



チーム分けされて作業にあたる

マーク・ホールカップ設置2名、グリーン散水（土壌水分計で計測をして手散水）4名、練習場ティ刈込（乗用3連モア）1名、バンカー均し（手均し）25名。なお、FW刈込はアウトとインに分かれ、ティからグリーンに向ってワンウェイ、刈込終了後にFWの清掃に入るパターンである。この作業の間、スープリ、アシスタント、セカンドの3名はコースを巡回している。4名のメカニクスは管理棟で待機。フェアウェイ刈込は、選任された2名の班長の指示と一緒に行動をする。グリーン刈込、散水、ホールカップセッティングとメカニクスにはトランシーバーを携帯させて、常に予期せぬトラブルに対応できるようにしていた。

我々は研修初日ということもあり、バンカー均しチームに組み入れられた。真暗な中でメキシカンのリーダーのもとに、カートのライトで照らされたバンカー砂をバンカーレキで斜面に向かって押し上げていく作業（大小57個の深さ1・8m以上のバンカー）である。通常管理でもバンカーライダーを使用しないバンカーだから、バンカー砂の凸凹が多く、最初は均すのに手間がかかった。



初日はバンカー均しチームに組み入れられた

散水で濡れたバンカーと乾いているバンカーでは、濡れたバンカーの方が作業はしやすかった。

8時

作業終了。

8時30分

全員で朝食。以降、休息。

13時

管理棟に戻り、昼食（イン&アウトのハンバーガー）。

15時

午後の作業ミーティング。

15時30分

午後の作業開始。FW刈込13名（刈込ラインは横、ラフで

ターンをしないように指示が出る）。

ラフ刈込（5連ロータリーモア）2名、ティ周り刈込（乗用3連リールモア）3名。ティ刈込（トーナメント時の使用ティ以外）4名、ティのディボット跡目砂1名、バンカーエッジ刈込2名、グリーン転圧（4名1組で2班）、散水6名、FWのディボット跡目砂8名、FW・ラフ清掃10名。

午後の作業は、リビエラコース管理スタッフがメインの作業を行う。終礼はなく、19時前後にチームごとに作業終了。

19時30分

ホテルに戻る。

2月17日（火）

指定練習日のため、午後作業の開始時間が15時となる。

4時

作業指示ミーティング。

作業車の走行エリアなど、前日の作業で徹底されなかった事項について指摘がある。

4時30分

前日同様に作業開始。

作業内容は16日と同様で、我々の作業も同様であった。この早朝作業時



モアを初め、移動に使う乗用カーなど、いろいろなものにライトが取り付けられている

間に、モートン氏の師匠で元オーガスタナショナルGCのスープリであるポール・ラトショー氏の話聞く機会があった。ラトショー氏は「近年のコース管理は、土壌分析と水分管理がもっとも重要である」と言っていた。余談だが、リビエラCCで使用していたグリーンモアは日本製だったが、ラトショー氏は「このグリーンモアの採用でグリーンのコンディションが向上した」と高い評価をしていた。具体的には、年間を通じて同じ刈高で管理が可能になったらしい。なお、今回のグリーンの刈高は2・6mmだったが、この刈高は年間を通じてほとんど同じということである。

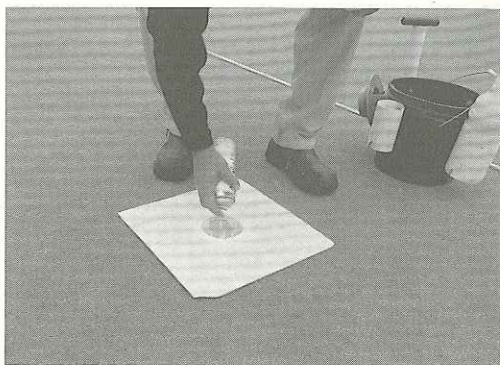
8時30分 朝食。

10時 モートン氏の案内でクラブハウス内（宿泊施設・ミュージアム）、コース用散水設備棟（貯水タンク・送水ポンプ）を見学、説明を受ける。

11時 自由時間を利用して、練習ラウンドの見学を兼ねてコース視察。

13時30分 昼食（メキシカンフード）。昼食後にアシスタントスーパリのダン・ミラー氏に研修参加者3名のスキルについて確認があり、内山と田中はグリーン刈りを、乙黒にはFW刈りを担当させることになる。また、午後作業で余裕がある時は、随時いろいろな作業を経験させることとした。

15時 午後の作業ミーティング。乙黒がFW刈込グループに加えられる。内山・田中はグリーン刈込練習を予定していたが、グリーンスピードが13フィートを超えたため、予定していた午後の刈込が中止となり、FWのディボット跡目砂を



ホールカップの縁は白くペインティングする

行う。FW刈込の乙黒は相当緊張していたが、初めての経験としては上出来だったと思う。その他の作業は前日と同じ内容であった。

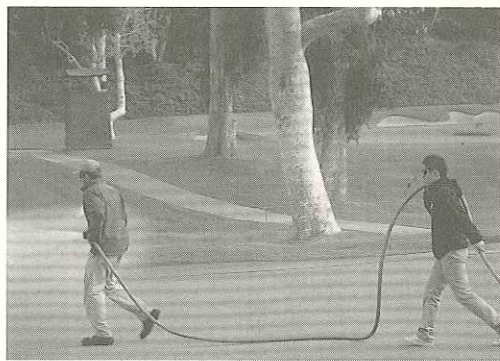
19時30分 ホテルに戻る。

2月18日（水）

この日はプロアマ競技の日である。

4時 作業指示ミーティング。

4時30分 前日同様に作業開始。乙黒はFW刈込。真暗ななかで、並んで同方向に刈る作業は、初めての



散水はすべて手散水

体験だったはずである。内山・田中はグリーン刈込サポートとして、刈込スタッフに同行する。作業は、グリーンカラーにボードを置いてターンによる芝のダメージを保護する手伝いをする。内山・田中とも作業の後半（6番サブグリーン・17番グリーンの一部）に刈込をする。乙黒は刈込終了後、FWの清掃。内山・田中は刈込終了後、グリーン周りの清掃を行う。

8時30分 朝食。

9時30分 モートン氏との勉強会（1時間）。内容は、モートン氏がもつ

とも重要視しているコース管理手法と労務管理、予算内容について。

13時30分 昼食（ピザ）。PGAオブアメリカの会長、デレク・スプレグー氏が管理棟のテントに来て、スタッフ全員の前でトーナメント開催に向けての準備について謝意を述べた。特に印象的だったのは、ほとんどが軽作業スタッフであるメキシカンスタッフに向けて、「君たちの日頃の作業のおかげで、ここまでの素晴らしいコースに仕上がった」と言っていたことである。

15時30分 プロアマの終了まで作業が開始できないので、30分遅れで午後のミーティング。翌日からの本戦に向けての注意事項の確認。そして、今朝の作業でのケアレスミス（18番ラフでFW用乗用3連モアのユニット操作ミスによる刈跡が残る）を指摘され、各自が注意をして作業をするように言われた。

16時 午後の作業開始。内容は前日と同様。コース内の至るところに乾燥害が出てきたので、スプリンクラーによるスポット散水を実施。

19時30分 ホテルに戻る。

2月19日(木)

大会初日。スタッフにも何となく緊張感が漂う。

4時 作業指示ミーティング。

トップスタートが6時50分というところで、7時30分までにすべての作業が終了するように指示が出る。この日から応援スタッフが、さらに5名加わった。

4時過ぎ ダン・ミラー氏より作業の指示が発表されると、各担当者はミーティング終了を待たずに現場に出ていった。乙黒はFW刈込、内山・田中はバンカー均し作業に入る。バンカー均しも増員されたが、砂に混じっている小石拾いを前述したジェイ・スボール氏から指示された。

6時 PGAツアーの競技委員のホールカップ・ティマーク・ハザードラインの確認作業が始まる。同行したコース側スタッフ(セカンダアシスタントと他2名)は、ステインプメーカーによるグリーンス

ビードの計測とグリーンの硬さを計測してシートに記載した。グリーンスピードは13フィート以上(シングルカット)、硬さは日本と計測手法が違う(※クレグハンマー)ので、ひと言でいえば『とても硬い』グリーンだった。プロのショットでわずかにボールマークがつく程度で、日本のように砂を押し込む必要もなく、ローラー転圧係がほんの少し直す程度である。参戦していた松山英樹も「日本のトーナメントグリーンとは別次元の硬さ」と話していた。

7時30分 全員管理棟に戻り、8時から朝食。

8時30分 モートン氏よりスタッフ全員に今日までの作業へのお礼と、これからの4日間緊張感を持って仕事に従事するように話があった。

9時30分 ホテルに戻り休息。

13時30分 管理棟に集合。某農薬メーカーによるバーベキュー昼食が提供される。トーナメント中なのに、煙を出しながらグリルで肉を焼いている。これは驚きでしかなかった。

た。昼食後、選手が13番ホール(管理棟横)を終了した段階で作業に入ると指示が出る。

16時 午後のミーティング。

作業内容は前日とほぼ変わらないが、他の作業が延びても、グリーンのローラー転圧だけは日没までに終了させるように指示が出る。FW刈込は中止。我々は、FWのディボット跡目砂とラフの清掃作業をする。

20時30分 作業の終了が押して、いつもより遅くホテルに戻る。

2月20日(金)

大会2日目。前日1組だけサスペンデットだった。

4時 作業指示ミーティング。昨日同様に時間に追われる作業段取りとなる。

4時過ぎ 作業開始。乙黒・内山・田中が今日はバンカー均しをする。作業にも慣れが出て要領をつか

ってきたので、他の応援者より優っている感じがした。事実、ゴルフ場スタッフには相当頼りにされるようになる。

7時30分 作業終了。

8時 朝食。

9時過ぎ ホテルに戻り休息。この辺りから、寝不足もあり疲労はピークに達する。



通年で刈高2.6mmだけに芝の根も短い



グリーンは硬く、転圧時に若干の修正をするのみ

13時30分

管理棟に集合。某散水メーカーによるメキシカンフードのケータリングサービスで昼食。昼食後はコース（トーナメント）見学。

16時

午後の作業ミーティング開始。作業指示は前日とほぼ同様。コースはどんどん乾いてきており、散水担当者が増員される。新たにバンカーの小石拾いの作業が追加される。サスペンデットもなく、翌日から決勝ラウンドを迎える。

20時30分

ホテルに戻る。

2月21日(土)

決勝ラウンド。作業開始時間が1時間遅くなるため、4時起床。この1時間がありがたく感じる。

5時

作業指示ミーティング開始。

5時過ぎ

作業開始。時間に余裕があるためか、動きにもゆとりがあった。作業は、前日と同様。我々はバンカー均し作業の後、7時よりコースセッティング（ホールカップ

設置）を手伝う。前日に決められたホールロケーションシートを見ながら、前日夕方に白くマークされたグリーン上の点を探し、そこにホールカップを切る。このマークは、グリーン上の傷をなくす意味もあってピッチマークにされることが多く、見つけるのに苦労した。

8時30分

朝食。

9時30分

ホテルに戻り休息。

13時

昼食。

14時

午後の作業ミーティング。

15時

作業開始。作業時間に余裕があるので、業務内容に変更があった。また、作業開始前に11番ティ横でスタッフ全員で写真撮影を行う。主な変更は、グリーン刈込（初めての午後刈込ダブルカット）、FW刈込（横ラインでの刈込）、ラフ刈込（ティ周り刈込。乙黒はFW刈込作業に入る。その後、グリーンの転圧を経験させた。内山・田中はグリーン刈込補助作業に入る。ダブルカット

はカタビラの穂が朝の刈込だけでは取れないためだが、これはディレクターのスポール氏の指示である。18時に作業終了。

19時

リビエラCCCから車で10分のサンタモニカ市内で管理スタッフだけの懇親会に参加。管理棟では雰囲気盛り上がりがないとスポーツバーを貸し切ったもの。配慮とスケール感の大きさに感嘆した。

2月22日(日)

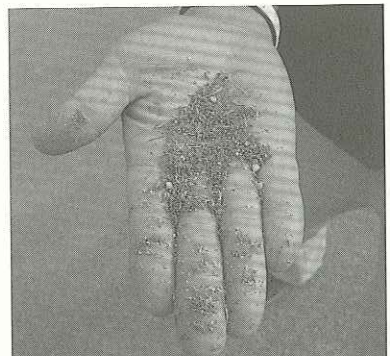
最終日。この日も1時間遅くスタートする。

5時

作業指示ミーティング。モートン氏から全員に感謝の挨拶があった。応援者も作業終了後にはゴルフ場に戻る者もいるので、来年の再会を誓って作業にあたる。

5時過ぎ

作業は前日と同じだが、我々は最後の研修ということでグリーン刈込班と行動をとにした。雨予報の天候の影響もあり、朝露が全くのつておらず、刈込ラインが見えないため補助をすることとなる。



1つのグリーンの刈込で出る刈粕量

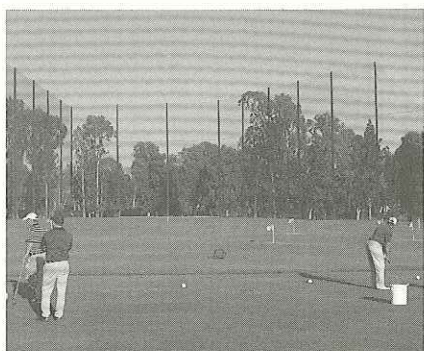
真暗ななかで、グリーンモアのライントだけを頼りに刈込をするのは、ミスが許されない状況下では補助がいってもかなり困難である。明るくなつて、ラインが薄く見えるようになった時刻から内山・田中・乙黒のグリーン刈込が始まる。緊張からか本来の力が発揮できたのかどうか疑問が残るが、現地スタッフよりは確かに上手であったと思う。

8時30分

すべての作業が終了し、朝食を摂って解散。

通常のセッティングで そのままトーナメントを 実施

今回の研修に参加した若手3人は、日本のトーナメント管理と海外との



広々とした練習場

違いを実感したと思う。コース管理は、トーナメントに限らず日々の業務にしても裏方の仕事である。しかし今回我々は幾度となく、PGAオブアメリカの会長をはじめ、関連団体やゴルフ場のトップの来訪を受けた。彼らは一様に管理作業への感謝を口にし、末端の作業員にまで労をねぎらう言葉をかけている。連日のきつい作業であっても、表舞台を輝かせる演出者という意識を持って仕事に当たることができたと思う。

また、コースセッティングは、特別なトーナメント仕様ではない。スーパージンテンドメントのモートン氏によると、「通常と同じ」そうだが、要望されたのは、フェアなセッティングとグリーンスピードが13フィートを超えないことだけ。各エリアの刈高は、グリーン2・6mm、ティ・FW10mm、ラフ50mm。FWの刈幅も狭くはしていなかった。それでも、優勝スコアは6アンダー。ラフを長くして難易度を上げる方法が果たして正しいのか、改めて考えさせられた。年間3万ラウンドで、このセッティングではプレー進行に問題が出そうだが、モートン氏によると「メンバーシップだし、混雑しているな

らば練習場があるから、そこでボールを打っている」それで、問題はなという。

土壌分析と葉身分析など データ解析を 基に管理計画

さらに驚いたことは、グリーンの更新作業の手法である。カタビラが多く混在しているため、薄目砂は全くないとのこと。年3回の更新作業の際に、砂をたっぷり使用することでグリーン面の凹凸修正とサッチコントロールは出来ているという。ちなみに、更新時の目砂量は全部で30tという話だった。

作業指示書（分担表）は通常時もトーナメント時もアシスタントスープリが作成するが、基本的に土壌分析と葉身分析で集積された過去のデータとフィールドでの10数年の経験を融合させて、独自の管理手法を生み出していく。これが、近年の米国式コース管理である。

このトーナメント開催でのコース管理予算は3000万円、リビエラCCの年間コース管理予算が2億7000万円（別途、設備費4〜5000万円）というから、そもそも日

本とは大きな違いだが、ゴルフ産業として見ても、日米のスケールの差を目の当たりにしたというのが素直な感想である。ただし一方で、コース管理者としての「技術」という点では、全く遜色なく、むしろ上級レベルに位置していることを実証できたと思っている。日本の技術的な高さを、もつと外国にアピールしていかなくてはならないと強く感じた。同時に、各種の計測・分析などを通じたデータの数値化を促進し、「技術」をより効率よく発揮できるようにすることが大切である。そして状況の変化にきちんと対応できる、レベルの高いコース管理者を目指してほしいと思う。



管理スタッフたち